横川・本町遺跡

分譲住宅地造成工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

2002

大和ハウス工業株式会社金沢支店
石川県石川郡野々市町教育委員会

横川・本町遺跡

分譲住宅地造成工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

2002

大和ハウス工業株式会社金沢支店
石川県石川郡野々市町教育委員会

例　　言

1　本書は、石川県石川郡野々市町本町１丁目地内に所在する横川・本町遺跡の発掘調査報告書である。

2　本書は、宅地造成工事に起因する横川・本町遺跡の緊急発掘調査報告書であり、野々市町教育員会が大和ハウス工業株式会社金沢支店の委託を受けて2001年度に調査を実施したものである。調査面積は220㎡であり、調査費用は大和ハウス工業株式会社金沢支店が負担した。また、表土除去に係る重機及び現場仮設事務所、仮設便所については大和ハウス工業株式会社金沢支店より提供を受けた。

3　現地での調査は、平成13年４月10日から４月23日までの延べ14日間を要し、野々市町教育委員会文化課主査横山貴広が担当した。なお、測量作業については同主事布尾和史(石川県教育委員会文化財課派遣)、徳野裕子の補助を受けた。

4　遺物の整理は、洗浄からトレースまでの一連の作業を増山明美がおこなった。その他、遺構図トレース、図版作成、写真撮影を横山がおこなった。

5　本書の執筆及び編集は横山がおこなった。

6　図版の縮尺はすべて図上に標示し、水平基準線レベルは海抜高である。なお、方位はすべて磁北を指す。なお、写真図版の出土遺物については縮尺不同であり、付した番号は挿図番号に一致する。

7　調査によって得られた資料及び遺物は、野々市町教育委員会が一括して保存管理している。

8　発掘調査から報告書作成に至るまで、多くの方々や機関からご教示、ご協力をいただいた。以下にご芳名を記して深甚の謝意を表したい。(順不同・敬称略)

小西昌志・新出敬子・出越茂和・本田秀生・前田雪恵・三浦純夫・南　久和

宮本哲郎・向井裕知

石川県教育委員会・金沢市教育委員会・大和ハウス工業株式会社金沢支店

有限会社ホンダプランニング・丸一繊維株式会社金沢工場・清水建設株式会社

目　　次

1　遺跡の位置と環境 …… 1

2　調査に至る経緯と経過 …… 3

3　遺構と遺物 …… 6

4　まとめ …… 17

写　真　図　版

報　告　書　抄　録

1　遺跡の位置と環境

石川郡野々市町は南北に細長い石川県の中央部を占める金沢市に南郊し、西を松任市、南を鶴来町と接する南北6.7km、東西4.5km、面積13.56km²を測る平野部に位置する町であり、人口約43,000人を有する日本海側随一の雄町である。

第１図　野々市位置図

横川・本町遺跡は野々市町本町１丁目地内と金沢市横川３丁目地内に行政境を跨いで位置している。周辺は旧北国街道に面し、昔からの趣を残す通称「荒通」（荒町）と呼ばれる旧家群と新興住宅群が密集しており、当町でも最も早く開けた地域のひとつである。今回対象となった調査区についてはこの住宅街の北側に存在した丸一繊維株式会社金沢工場の跡地東端であり、２級幹線本町２丁目丸木線（旧北国街道）の上を国道157号線が立体交差する地点から南東方向へ約300mの地点に当たる。東側を金沢市に接し、さらに東に北流する高橋川左岸の自然堤防上に当たると思われ、標高は14m前後を測る。

当遺跡周辺における人々の足跡は、縄文時代後期中葉にまで遡れることが馬替遺跡、押野大塚遺跡、米泉遺跡の存在により確認される。その後、周辺での遺跡の増加が確認されるのは弥生時代後期後半になってからであるが、一部高橋セボネ遺跡において前期段階のものが確認されている。後期後半～末にかけては、前述の高橋セボネ遺跡において良好な集落跡が調査されており、他にも高橋ウバガタ遺跡、押野タチナカ遺跡、押野ウマワタリ遺跡、扇が丘ゴショ遺跡、扇が丘ハワイゴク遺跡、扇台遺跡などが知られている。これらの内高橋セボネ遺跡、扇が丘ゴショ遺跡、扇が丘ハワイゴク遺跡、扇台遺跡については当遺跡と同様高橋川右・左岸の自然堤防上に展開した集落跡と考えられる。その後古墳時代に入ると、平野部の集落跡と考えられる遺跡は窪遺跡、久安トノヤシキ遺跡、有松C遺跡、寺地シンドロ遺跡などが知られるが、いずれも散布地ということで詳しいことは不明であり、希薄な印象を受けることは否めない。この地域に現代に続く本格的な開発の動きが顕在化するのはやはり古代末～中世にかけてのことであり、加賀の守護冨樫氏の関連とみられる遺跡が増加する。本町２丁目から住吉町にかけて広がると思われる冨樫館跡は平成６年度の調査により内郭西側と見られる濠の跡が一部確認されており、溝底より和鏡１点が出土している。この他に押野３丁目地内には冨樫系武士団押野家善の居館である押野館跡が知られており、また本町２丁目地内には冨樫家重臣山川館跡が存在する。これらの遥か

A. 横川・本町遺跡
1. 高橋セボネ遺跡
2. 新保チカモリ遺跡
3. 御経塚シンデン遺跡
4. 御経塚遺跡
5. 長池キタバシ遺跡
6. 米泉遺跡
7. 押野タチナカ遺跡
8. 押野ウマツタリ遺跡
9. 長坂二子塚遺跡
10. 山科うわの塚遺跡
11. 扇が丘ゴショ遺跡
12. 蓮花館跡
13. 扇が丘ハツイゴク遺跡
14. 高尾イシナ塚古墳
15. 扇台遺跡
16. 高尾公園遺跡
17. 高尾城跡
18. 藤谷ドウシンダ遺跡
19. 栗田遺跡
20. 末松廃寺跡
21. 下新庄アツチ遺跡
22. 上林新氏遺跡
23. 上新庄ニシウラ遺跡
24. 四十万CD遺跡

第２図　周辺の遺跡（1/50,000）

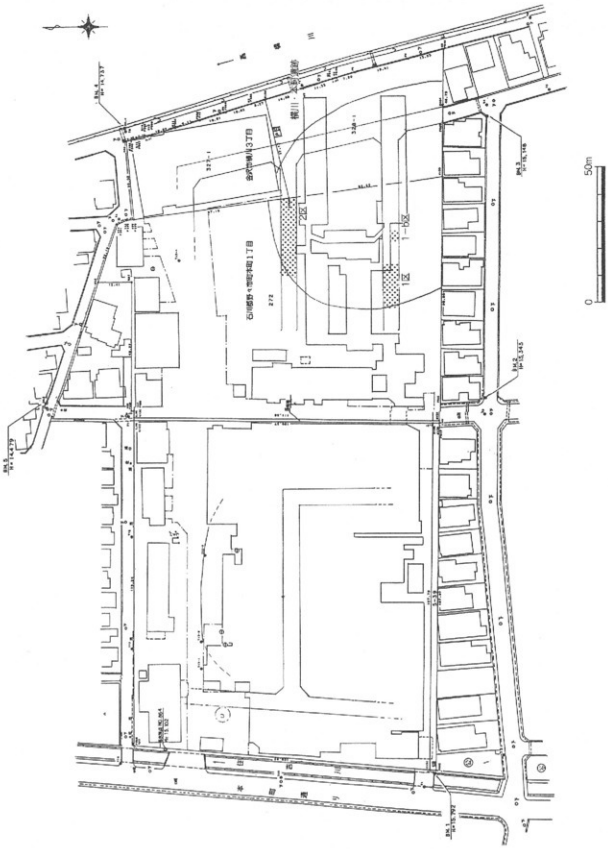
東方冨樫丘陵上には1488年に一向一揆軍により落城した高尾城跡がひかえており、高橋川流域でも扇が丘住吉土地区画整理事業に先立ち実施された一連の発掘調査で明らかとなった冨樫館跡鬼ヶ窪地区・同蝦土居地区、扇が丘ヤグラダ遺跡、扇が丘ハワイゴク遺跡や河川改修にともなう扇が丘ゴショ遺跡、扇台遺跡などが存在する。これらの遺跡群は石川県内でも中世段階において歴史上非常に重要な位置を占めており、野々市町東部及び金沢市南部は該期の一大拠点であったことは間違いない。また、当遺跡は1261年に冨樫家尚が加賀押野荘野市字外守に建立したと伝えられる大乗寺の寺域推定地にも隣接しており、今回の調査でも該期の遺構・遺物の存在が予想されたが僅かな包含層資料の検出にとどまった。

2　調査に至る経緯と経過

横川・本町遺跡は、平成12年３月末に操業を停止した丸一繊維株式会社金沢工場跡地に計画された分譲住宅地造成に先立ち発掘調査されたものであり、町教育委員会文化課が開発事業者より埋蔵文化財の有無について照会を受けたのは同年７月中旬のことであった。周辺は町内でも早くから開発がおこなわれた地区であり、埋蔵文化財の分布状況把握が十分為されていないことに加え、開発面積が金沢市側を含んで約27,000㎡にも及ぶことや高橋川流域での周辺遺跡の動向、また先に述べた大乗寺寺域との関連等を検討した結果、教育委員会としては対象地における詳細な分布確認調査が必要であると判断し、開発事業者へ理解と協力を求め快諾を得た。

操業停止後の残務整理がおこなわれている中、開発事業者及び丸一繊維㈱側責任者の了承を得て、９月７日に第一次試掘調査を実施した。試掘坑の設定については、依然として従前の建物が残されていることから緑地や空き地、運搬作業の支障とならない未舗装の通路等を中心に８箇所のトレンチを設定し、相当量の盛土が予想されたことから当初より0.4㎡の掘削機を用いて調査をおこなった。その結果、対象地南東側の金沢市と境を接する付近を中心に弥生時代後期後半頃と思われる遺構の広がりが確認され、その内の竪穴住居跡と思われる遺構の床面より高坏受け部の完形品（第４図１）や脚部(第４図２)、また竪穴住居跡を切って須恵器小片を伴う古代の溝などが検出され、一帯に該期の良好な集落跡が存在することが確認された。このため、さらに詳しく埋蔵文化財の広がりを確認するため、建物部分以外の舗装部分についても舗装を剥がして調査させて欲しい旨を開発事業者、工場責任者に依頼し協力を求めた。翌８日、金沢市埋蔵文化財センターへ調査結果の概要を報告し、金沢市側としても対象地での試掘調査を実施する意向であることを確認した。

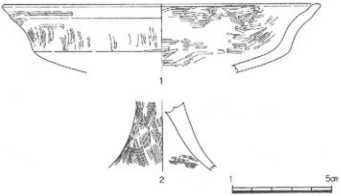
第二次試掘調査は９月20日に実施、アスファルトカッターを用いて駐車場、構内道路下を中心に８箇所の試掘坑を設定した。その結果、先に確認されていた敷地南東側に所在する埋蔵文化財については西限、北限がほぼ確定したものの新たに中央やや西寄りにピット状遺構、土師皿、微小骨片を検出したトレンチが見られ、別の埋蔵文化財の存在を覗わせたがその北側については関連する状況を確認できず、南側の工場下へ伸びる可能性を残す



第３図　横川・本町遺跡発掘調査区図

にとどまった。

第三次試掘調査は現地での建物解体工事がほぼ終了した1月29日に実施しており、試掘坑の設定については、これまで埋蔵文化財が確認されている地点に隣接する建物下部分に限定した。その結果、第二次試掘調査で確認された中央西寄りに分布する埋蔵文化財は、その南側の大半が工場の基礎工事により破壊されているものと思われ、確認された地点についても宅地となることが確定していたため盛土による現状保存措置とし、今回の発掘調査対象からは除外することとした。三次にわたる試掘調査の結果決定した調査区については第3図の通りであり、街路部分以外の宅地部分についてはすでに盛土が厚く施されており、現状で遺構面より120～140cmを測ることから現状保存措置とすることで開発事業者の了解を得た。その後数度の協議を重ね、4月2日付で開発事業者と発掘調査に係る受委託契約を締結し、4月10日に現地調査に着手、同23日に終了した。また、発掘調査対象地の表土除去については、3月26日に開発事業者及び建物解体工事業者である清水建設株式会社のご好意により掘削機並びにオペレーターを提供していただき実施している。なお、横川・本町遺跡の名称については、行政区を跨いで広がる遺跡であり、試掘調査の結果からその中心が金沢市側にあると判断されたことにより双方協議の上決定したものである。



第4図　試掘確認調査出土土器（T・P－7）S=1/3

調査日誌抄

3月26日(月)	曇り	清水建設㈱の協力により調査予定地の表土除去作業を実施する。
4月10日(火)	晴れ	調査現場で調査着手の挨拶と最終調整をおこなう。
4月11日(水)	晴れ	現場事務所建て上げ（事業者である大和ハウス工業株式会社金沢支店の提供による。）
4月12日(木)	雨	実質的な調査初日にもかかわらず降雨のため作業中止。調査機材のみ搬入。
4月13日(金)	晴れ	1区西側より調査に着手。
4月17日(火)	晴れ	1区各遺構の土層堆積状況実測。同時に1－b区・2区の調査に着手する。
4月18日(水)	晴れ後曇り	遺構掘進作業終了。遺物取り上げ・遺構番号設置のあと布尾主事の協力を得て測量用の杭打ちをおこなう。

4月20日(金)　雨後曇り　　遺構平面実測作業、土層堆積状況実測作業終了。
4月21日(土)　晴れ後曇り　布尾・徳野両主事の協力を得て実測図にレベルを記入する。
4月23日(月)　晴れ　　機材撤収。本日で現場作業は終了。

3　遺構と遺物

当遺跡の調査区はいずれも街路建設部分にあたり、南側を1区、その東側に位置し、僅かに破壊を免れた小調査区を1－b区、北側を2区と呼称している。1区・1－b区については弥生時代後期後半～末を主体とした遺構・遺物が検出されており、一部古代のものも含んでいる。2区については検出された遺構・遺物が僅かであり、一部古代を含むものの大方は1区と同様な状況が看取される。ただ、各遺構の覆土は1区のそれとは明確に異なり、灰色粘土を主体としたものである。なお、遺物の詳細については紙数の制約もあり別途遺物観察表を参照願いたい。

SX－1（遺物図版第9・10図44～57）

1区北西側に位置する略楕円形を呈する遺構であり、土坑として扱っても良いものである。長軸推定で約2.7m、短軸1.67m、深さ最深で61cmを測り、埋土は暗褐色土、暗灰色土を主体とする。検出当初はSD－2・3との干渉地点が別の土に薄く覆われており、プランを明確に確認することができなかったが、後の土層断面の観察よりSD－3に先行するものと思われる。遺物については今回の調査で最も多くの土器が出土しており、14点図示している。

SX－2（遺物図版第10図70～72）

1－b区中央に広がる落ち込み状の遺構であり、全体を確認できていないため性格は不明であるが、掘進時の印象では掘り方も曖昧であり鞍部である可能性が高い。埋土は黒色土、灰黄色土を主体としており、SD－3bに明瞭に切られている。遺物は3点図示している。

SK－1（遺物図版第8図4～7）

1区西側に位置する大型の土坑である。長楕円形を呈するものと思われるが，南半に撹乱を受けており全体を知ることはできない。検出された部分で長軸3.6m以上、短軸1.4m程度を測り、深さは最深で40.3cmである。埋土はやや淡い灰色粘質土を主体とし、底面近くで砂質を帯びる。遺物は4点図示している。

SK－2

1区のほぼ中央南側に位置する長楕円形の土坑である。南端をSD－4により切られているものの形態より長軸は2.47m程度と思われ、短軸最大で0.94m、深さ最深で39.3cmを測る。

埋土は褐色系土、灰色系土共に淡い色調を主体とし、SK－１同様他の暗褐色土を主体とする遺構群とは一見して明瞭な差異がある。遺物については小片のみ僅かの出土であり図化に耐えるものは見られないが、弥生時代後期後半のものであることは間違いない。なお、SK－１・２ともに掘り方の壁及び底面がはっきりと確認されることから風倒木痕である可能性は低いと思われる。

SK－３

２区の中央やや東寄りに位置する不定形の土坑であり、長軸1.4m、短軸0.52cm、深さ最深で14.8cmを測る。また、内部のピットは土坑底面より５cmの深さである。埋土は淡い灰色粘質土を主体とするが、SK－１・２の埋土とはまったく異なる土質である。遺物は出土していない。

SD－１

１区西端に位置する小規模な溝である。SD－２に後続するものの、検出時にSK－１上面で確認することができなかったためSP－２の地点で収束するものであろう。長さ約５m、幅最大で37cm、深さ５cm程度を測り、埋土は暗褐色土の単層である。遺物は出土していない。

SD－２（遺物図版第８図８・９）

１区西端から中央にかけて北東方向に伸びる溝であり、底面のレベル差より西から東へ向けて緩やかに下がるものと思われる。検出長は10.8m、幅最大で48cm、深さ８cm程度を測り、SD－１に直行するように切られているが、SD－３との前後関係は検出状況が錯綜していたため確認できていない。埋土は暗灰褐色土を主体とし、底面近くで地山質の土が混入する。遺物は２点図示している。

SD－３・３b（遺物図版第９図13～22）

１区北端に位置する東西方向の溝であり、今回の調査で確認された溝としては最大のものである。検出長約9.6m、幅最大で108cm、深さ36cm程度を測り、東西での底面のレベル差は特に看取されない。埋土は暗褐色土・暗灰色土を主体としており、遺物の出土量はSX－１に次いで多い。遺物は10点図示している。

また、１－b区で確認されたSD－３bは同一の溝と思われ、少なくとも延長で20mを超える規模を持つものである。

SD－４（遺物図版第８図10・11）

１区東側に位置する東西方向の短い溝であり、布掘りの掘立柱建物となる可能性も考えられたがそれにしては深さが浅く、底面で明瞭な柱の痕跡が確認されることもなかった。

長さ5.5m（実長５m）、幅最大で54cm、深さ18～23cm程度を測り、暗灰色土・黒色土を主体とし、底面近くで地山質の土が混入する。遺物は２点図示している。

SD－５（遺物図版第８図12）

１区東端に位置する南北方向の溝であり、内部にピット状の小さな窪みを多く持つ。検出長6.7m、幅114cm、深さ10～20cm程度を測り、北に向けて緩やかに下がる。埋土はやや淡い褐灰色土の単層であり、SD－３に先行するものである。遺物は１点図示している。

SD－６（遺物図版第10図74）

２区西側に位置する南北溝であり、南側に建物基礎による攪乱を受けている。検出長4.42m、幅110cm、深さは溝自体は７cm程度であるが、北側の大きな窪みは34cmを測る。埋土は淡い灰色系の強粘質土を主体としており、１区で見られた遺構とは明確な差異が認められる。しかし、出土した甕は残存状況よりほぼ原位置を保ったものと思われ、混入品とは考え難い。

SD－７（遺物図版第10図75）

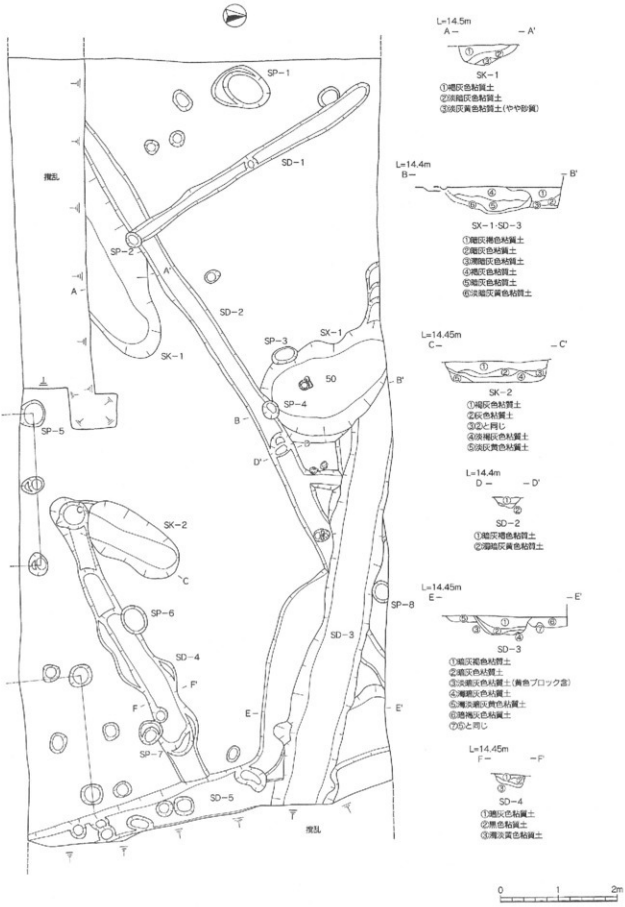
２区東端に位置し、南東―北西方向に伸びる溝である。検出長約2.6m、幅46cm、深さ６～10cmを測り、切り合いからSD－８に先行することが確実である。埋土は暗灰色土の単層であり、１区で主体的な弥生時代後期後半期の遺構覆土と共通である。遺物は１点図示している。

SD－８（遺物図版第10図76・77）

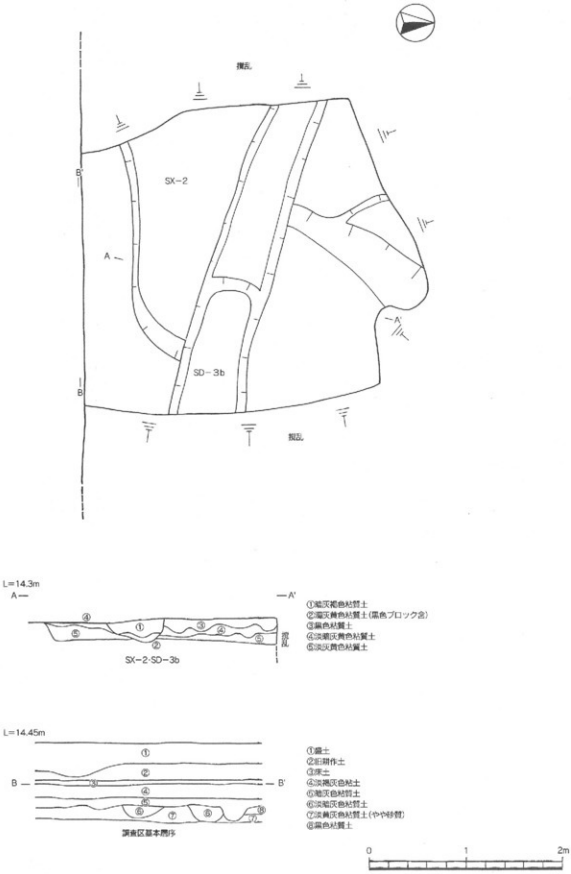
２区東端に位置する南北溝であり、検出長約3.8m、幅最大で185cm、深さはテラス部で９cm、中心で20cm程度を測る。中央部にピット状の窪みが見られるが、掘り方の意匠が明瞭でなく意図的なものかどうかは判断し難い。両側で建物基礎による攪乱を受けており、埋土は灰色または淡い褐色を帯びた強粘質土が主体であり、底面近くに流水を覗わせる荒い砂層が確認される。遺物は２点図示している。

その他、遺物が出土したピットについては１・２区合わせて10基あるが、図化できたSP－７・10以外はいずれも小片であり掲載することはできなかった。柱列とした１区南側の２基についても遺物を確認できたのはSP－５からの小片２点のみである。図化はかなわなかったものの、胎土の観察より弥生時代後期後半の甕体部片と思われる。

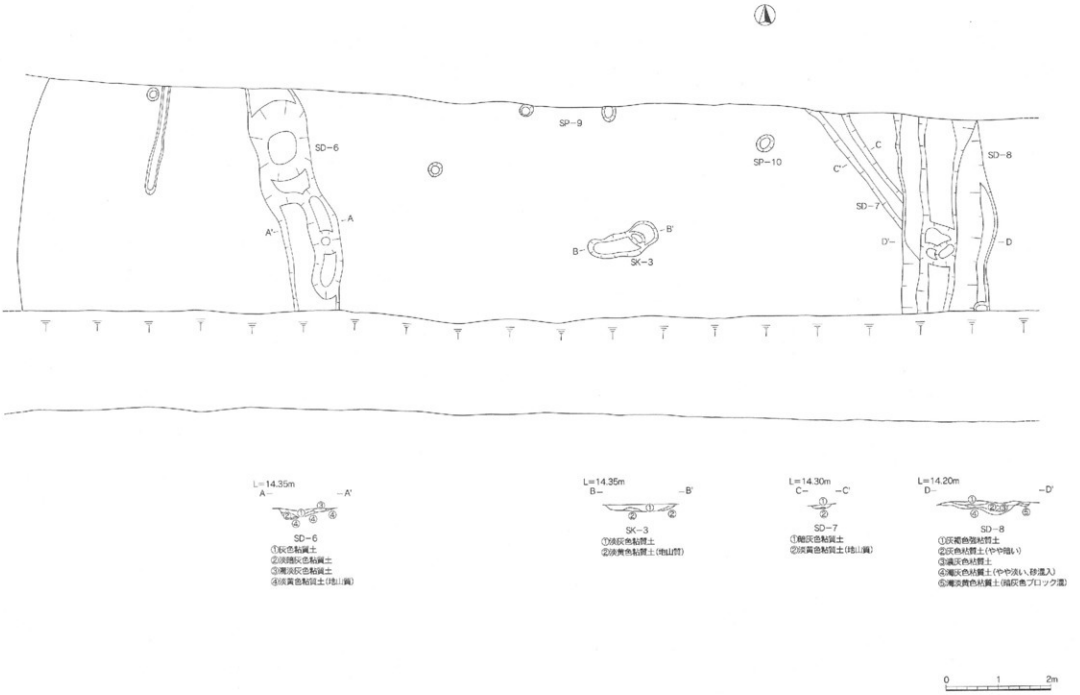
また、SD－３とSX－１の接点付近（第９図23～43）については前述のとおりの事情から明確に区別して掘り進むことができなかった。21点と最も多くの図化であるが、担当者の不手際を恥じるばかりである。ただ、それらの中にも若干の時間差が看取され、23・24・27・28・40あたりがSD－３に、25・26・38・39あたりがSX－１に帰属するものであろう。



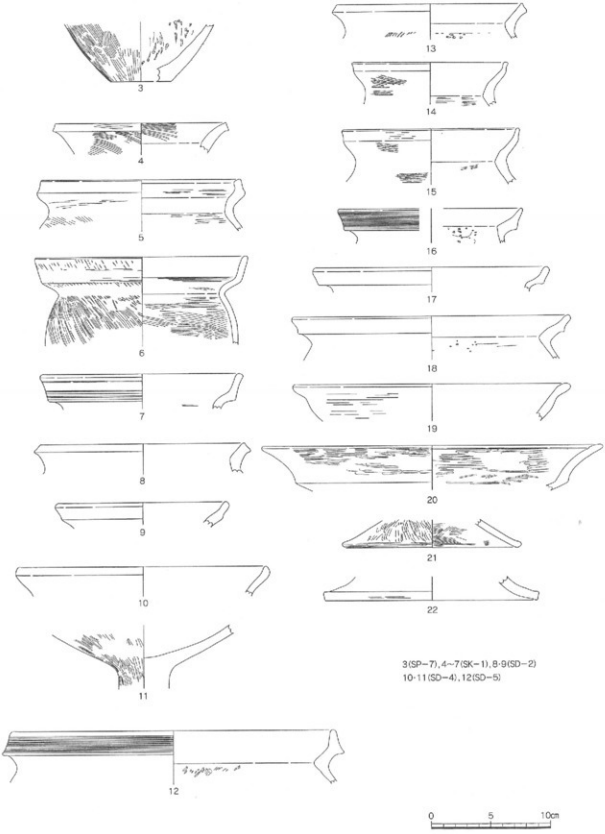
第５図　１区遺構実測図（S＝1/60）



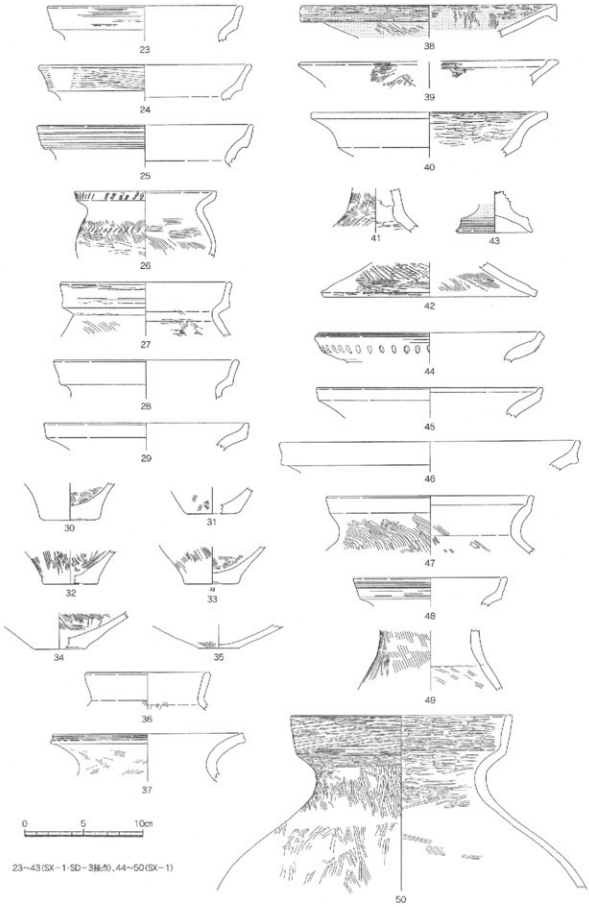
第６図　１－b区遺構実測図（S＝1/40）



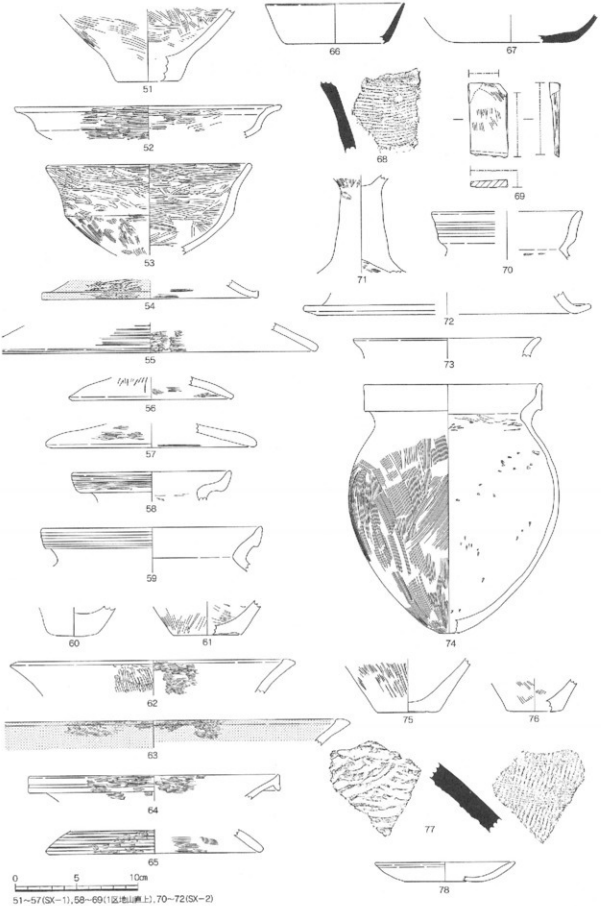
第７図　２区遺構実測図（S＝1/60）



第8図　遺物実測図（S＝1/3）



第９図　遺物実測図（S＝1/3）



51～57(SX－1),58～69(1区地山面上),70～72(SX－2)
73(SP－10),74(SD－6),75(SD－7)
76･77(SD－8),78(2区西端中山面上)

第10図　遺物実測図（S＝1/3）

遺　物　観　察　表

番号	器種	法量	調整	色調	焼成	胎土	遺存	備考
1	高坏	C:24.0	ミガキ	黄橙褐色	並	M-1, S-3 海・骨	完	磨耗激
2	脚部		ハケ	黄褐色	並	M-2, S-3 海・骨	4/5	剥離
3	底部	B：5.0	ハケ ケズリ	灰黄褐色 淡黄褐色	並	L-1, S-3	1/4	外面煤
4	甕	C:14.5	ハケ	黄橙褐色	並	L-1, M-2 S-3　赤	小片	
5	甕	C:16.8 N:15.6	ハケ	黄橙褐色	並	L-1, M-1 S-3　赤	小片	外面屈曲 部上煤痕
6	甕	C:18.0 N:13.9 W:16.4	ハケ→ナデ ヨコナデ ハケ	黄褐色	並	L-1, S-3 赤	1/4	外面煤
7	甕	C:17.2	ヨコナデ	暗淡褐色 黄褐色	並	M-1, S-1 赤	小片	外面煤
8	甕	C:18.3 N:16.6	ヨコナデ	黄褐色	並	L-1, M-1 S-2　赤	小片	外面煤
9	甕	C:14.8	ヨコナデ	淡黄褐色	並	M-1, S-2 赤	小片	外面黒斑
10	甕	C:20.9	ヨコナデ	淡黄褐色	並	M-1, S-2 赤	小片	内面煤
11	高坏	W:4.3 (柱)	ミガキ 磨耗	黄橙色 黒褐色	並	L-1, M-2 S-3　赤	1/2	内面煤
12	甕	C:27.2 N:26.4	ヨコナデ ケズリ	淡灰褐色	並	M-1, S-2	小片	外面煤 内面黒斑
13	甕	C:16.5 N:14.9	ヨコナデ ハケ・ケズリ	淡黄褐色	並	M-1, S-3 赤	小片	
14	甕	C:13.3 N:10.9	ナデ ハケ	淡黄褐色	並	M-1, S-1 赤	小片	
15	甕	C:12.7 N:10.5	ハケ→ナデ ハケ	淡黄褐色	並	L-1, M-1 赤	1/8	剥離
16	甕	C:(15.8) N:(12.5)	ナデ ケズリ	黄褐色	並	M-3, S-2 赤	小片	外面煤
17	甕	C:20.0	ヨコナデ	黄褐色	並	M-1, S-3 赤	小片	外面煤
18	甕	C:23.4 N:20.1	ヨコナデナ デ・ケズリ	黄褐色	並	M-1, S-3 赤	1/8	
19	高坏	C:23.4	ハケ ナデ	黄褐色	並	M-1, S-3 赤、石英	小片	
20	高坏	C:28.6	ミガキ	黄褐色	並	M-1, S-2 赤	1/7	外面黒斑
21	脚裾部	B:15.2	ミガキ ハケ	暗黄褐色 暗褐色	並	M-1	1/7	外面黒斑 内面煤
22	脚裾部	B:18.2	ナデ	黄褐色	並	M-1, S-2 赤	1/8	磨耗 剥離
23	甕	C:16.4 N:13.7	ヨコナデ	黄褐色	並	L-1, M-1 S-2　赤 石英	小片	
24	甕	C:17.9	ヨコナデ	橙褐色	並	L-1, M-1 S-2　赤 石英	小片	
25	甕	C:18.2	ヨコナデ	黄褐色 淡褐色	並	M-1, S-2 海・骨	1/7	
26	甕	C:12.0 N:9.8 W:11.9	ヨコナデ ハケ 内面下半ナデ	黄褐色	並	M-1, S-2 海・骨 石英・雲母	1/8	
27	甕	C:14.5 N:12.3	ヨコナデ ハケ・ケズリ	黄褐色	並	M-1, S-2 赤	1/8	
28	甕	C:15.6 N:12.8	ヨコナデ	黄褐色	並	M-1, S-2 赤	小片	外面黒斑
29	甕	C:17.3	ヨコナデ	黄褐色	並	L-1, M-1 S-3　赤	小片	
30	底部	B:5.0	ナデ・ハケ	黄褐色	並	L-1, M-2 S-2	1/2	炭化物
31	底部	B:4.8	ハケ 内面磨耗	暗褐色 淡黄褐色	並	L-1, M-2 S-2海骨	1/5	
32	底部	B:4.8	ハケ	淡黄褐色	並	M-1, S-2 赤	1/2	外面黒斑
33	底部	B:4.6	ハケ	黄褐色 暗灰褐色	並	L-1, M-1 S-2　赤 石英	完	内面黒斑
34	底部	B:4.9	磨耗・ハケ	褐色 黄褐色	並	M-1, S-2 赤	1/4	外面煤
35	底部	B:3.5	ミガキ 磨耗	黄橙褐色	並	M-1, S-3 赤	1/2	黒斑・煤
36	壺	C:10.6 N:9.5	ヨコナデ ハケ	暗褐色	並	M-1, S-1 海・骨	小片	
37	壺	C:16.2 N:11.7	ハケ→ナデ	黄橙褐色	並	L-1, M-1 S-2　赤	1/3	
38	高坏	C:21.5	ミガキ	淡橙褐色	並	M-1, S-1 海・骨	1/6	内外赤彩
39	高坏	C:(22.1)	ミガキ	黄褐色	並	M-1, S-2	小片	外面煤
40	高坏	C:19.9	ヨコナデ ミガキ	黄橙褐色	良	L-1, M-1 S-2　赤	1/6	
41	脚部		ミガキ 絞り・ハケ	黄褐色	並	M-1, S-2 石英	1/4	
42	脚裾部	B:18.2	ハケ→ミガキ ハケ→ナデ	黒褐色	並	M-1, S-2 赤	1/8	
43	台付鉢	B:6.5	ナデ	黒褐色 暗黄褐色	並	M-1, S-2 石英・雲母	1/8	外面赤彩
44	甕	C:18.8	ヨコナデ	黒褐色 黄褐色	並	M-1,S-2	小片	
45	甕	C:19.1	ヨコナデ	淡黄褐色 黄褐色	並	M-1,S-2 黒雲母	小片	
46	甕	C:25.4	ナデ	黄橙褐色	並	L-1,M-1 赤、石英	小片	磨耗激
47	甕	C:17.5 N:15.3	ヨコナデ ヘラ状具ナデ	灰黄褐色 黄褐色	並	L-1,M-1 赤	1/4	外面炭化物
48	甕	C:12.9	ハケ・ケズリ ヨコナデ	黄褐色	並	M-1,S-2 赤	1/8	
49	無頸壺	N:8.4	ハケ・磨耗	淡黄橙色 暗黄橙色	並	L-1,M-1 S-2　赤	1/4	磨耗
50	壺	C:18.7 N:14.4	ミガキ ミガキ・ハケ	黄橙褐色	並	L-1,M-2 S-2　赤	2/3	
51	底部	B:5.6	ハケ	淡黒褐色 淡褐色	並	M-1,S-2 赤	1/3	外面黒斑
52	高坏	C:22.0	ミガキ	淡黄褐色	並	M-2,S-2 石英・雲母	小片	外面黒斑
53	高坏	C:17.0	ハケ→ミガキ ミガキ	黄褐色	良	M-1,S-2 赤	1/2	
54	脚裾部	B:17.8	ハケ→ミガキ ハケ	黄褐色	並	S-2　赤 海・骨	小片	外面赤彩 内面黒斑
55	脚裾部	B:27.6	ミガキ	黄褐色	並	M-1,S-2 赤・雲母	小片	外面煤
56	蓋か	C:13.6	ハケ→ナデ ハケ	淡褐色	並	S-2 石英・雲母	1/5	
57	蓋か	C:17.3	ミガキ・ハケ	黄褐色	不良	M-2,S-3 赤	小片	磨耗激 剥離
58	甕	C:13.3	ナデ ハケ	灰黄褐色	並	M-2,S-3 雲母	1/7	内外黒斑 磨耗激
59	甕	C:18.3	ヨコナデ	灰黄褐色	並	M-1,S-3 赤・雲母	小片	磨耗
60	底部	B:4.3	ナデ	灰褐色 黄褐色	並	M-1,S-2 海・骨	完	やや歪
61	底部	B:5.6	ハケ・ケズリ	黄褐色	並	M-2,S-2 石英・雲母	1/4	
62	高坏	C:19.6	ミガキ	黄褐色	並	M-1,S-2 雲母	小片	端部黒斑
63	高坏	C:32.5	ミガキ	黄褐色	並	M-1,S-1 黒雲母	小片	内外赤彩
64	器台	C:20.7	ハケ→ミガキ ミガキ	黄褐色	並	M-1,S-2 海・骨	小片	外面黒斑
65	脚裾部	B:18.0	ミガキ・ハケ	黒褐色	並	M-2,S-3 石英	小片	内外黒斑
66	須恵坏	C:11.4 B:8.8 H:3.3	ナデ	暗灰色 灰色	並	砂質多	1/8	端部重焼痕
67	須恵坏	B:10.8	ナデ 回転ヘラ切	淡灰色 灰色	並	L-1,M-1 S-2	1/8	
68	甕 ([illegible])		タタキ目	暗青灰色	並	M-3,S-3 砂質	完	
69	砥石	L:6.0 W:3.2 D:0.9					完	21g
70	甕	C:(12.5) N:(9.9)	ヨコナデ 磨耗・ケズリ	褐色 黄褐色	並	M-1,S-2	小片	外面煤
71	高坏 (脚部)	W:3.4	ハケ→ナデ ハケ	灰黄褐色	並	赤	1/2	
72	器台 ([illegible])	B:(23.6)	ナデ	淡黄橙色	並	S-2	小片	内面煤
73	甕	C:15.5	ヨコナデ	黒褐色 淡黄褐色	並	M-1,S-2	小片	外面煤
74	甕	C:14.8 N:13.0 W:17.3 B:1.5 H:20.5	ヨコナデ ハケ・ケズリ ハケ・ケズリ	暗黄褐色 黄褐色	並	M-1,S-2 赤	1/3	外面煤
75	底部	B:5.2	ハケ・磨耗	灰黄褐色 暗灰褐色	並	M-1,S-2	1/5	外面黒斑
76	底部	B:4.8	ハケ	淡褐色 黒褐色	並	M-1,S-3 海・骨	1/6	磨耗
77	須恵甕		タタキ目	淡灰褐色 淡青灰色	並	L-1,M-1 S-1	完	
78	皿 ([illegible])	C:11.6 B:6.6 H:1.6	ナデ	黄橙褐色	並	M-1,S-3 赤	1/6	磨耗

○凡　例

・表中の番号は遺物図版の番号に一致している。
・法量の記号はC：口径、N：頸部径、W：体部最大径（幅）、B：底径、H：器高、L：全長（現存長）、D：厚さを表す。
・調整は上の部位から上段に、併記の場合は外面/内面の順に記している。
・色調は外面を上段に、内面を下段に記している。
・胎土は砂礫の大きさをL（5㎜以上）、M（3㎜～）、S（3㎜未満）で表し、大まかに1（少ない）、2（やや多い）、3（多い）で表している。
・遺存の度合いは実測図に対しての割合である。

4　まとめ

当遺跡で確認された遺構は大半が1区とした南側の調査区に集中しており、北側の2区については遺構の密度が非常に低い。また、種別も溝や土坑、ピットのみの確認であり、竪穴式住居や明確な掘立柱式建物は確認されていない。ただ、平成12年度におこなった分布確認調査では竪穴式住居と思われる貼床を持つ掘り込みが確認されており、完形の高坏受部と脚部（第4図1・2）が出土していることから集落跡と理解して差し支えないものと思われる。遺構面の土質については1区がしっとりとした淡黄色のシルト質であるのに対して、2区はやや橙色を帯びた粘土質であり、遺構検出に手間取るほど硬く締まったものである。事実、重機による表土除去段階で直上の包含層が土の境できれいに滑り取られていくほど異質なものであり、「土と土の馴染みが非常に悪い」印象を持った。遺構の覆土についても1区が暗褐色もしくは暗灰色粘質土を主体とするのに対して、2区はほぼ完形に復元される74が出土したSD－6でさえも全く異なる灰色粘土を主体としており、遺物が確認されていない場合にはとても同時期の遺構とは思えないほどの差異がある。また、調査に当たっては両調査区とも当初予想していた以上に従前の建物による破壊が激しく、実調査面積は計画の約7割程度にとどまった。

確認された遺物はそのほとんどが弥生時代後期後半の法仏式期に属するものであり、古代・中世のものについては明確に遺構に伴うものとして2区のSD－8より出土した須恵器甕の体部片（77）が1点見られるのみである。1区についても古代の遺物が若干量確認されているが、地山直上よりの出土であり該期の様相を知るには及ばない。周辺での既往の調査では高橋川の左岸、右岸ともに弥生時代末及び古代・中世の遺跡が数箇所確認されており、当遺跡も左岸自然堤防上に展開した弥生時代後期後半を中心とした集落跡と評価されるが、金沢市側（本調査区の東側）の調査区では弥生時代末の月影式期に当たる方形周溝墓2基と円形周溝墓5基、古墳時代初頭の方墳1基が確認されており[1]、この頃までには墓域へと変質を遂げた可能性が高い。宅地部分については現状保存ということでその全貌を知ることはできないが、野々市町周辺での遺跡分布の理解に新たな問題提起を成し得た調査であることには間違いない。

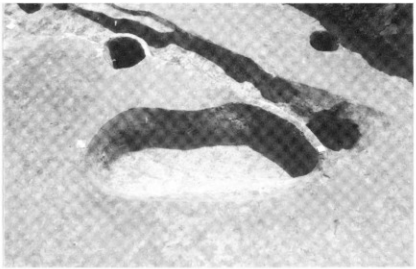
《注》

1　金沢市埋蔵文化財センター　前田雪恵氏のご教示による。

1区全景（西より）

1区全景（東より）

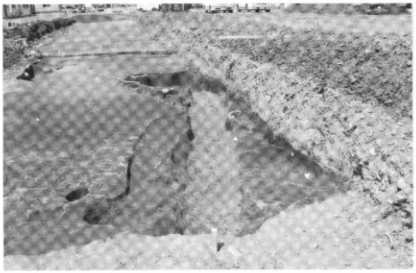
SK－1（北西より）



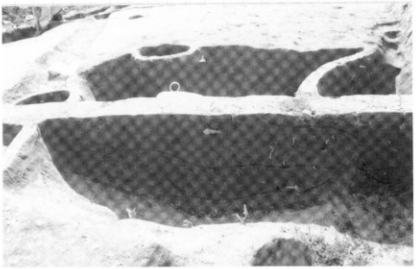
SK－2（北西より）

SX－1（西より）

SX－1　土器出土状況

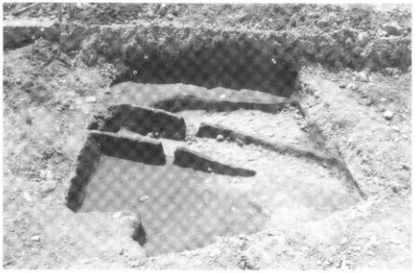


SD－3（東より）



SX－1、SD－3接点
土層堆積状況

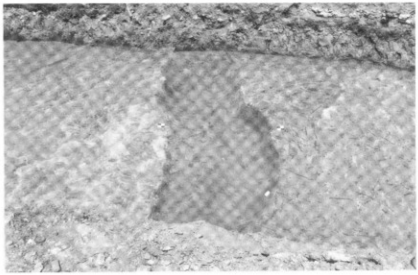
1区柱列（東より）



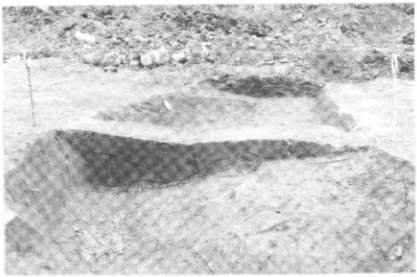
1－b区全景（北より）

2区全景（東より）

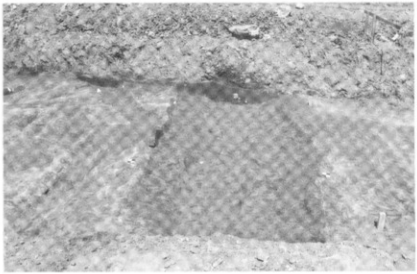
SK－3（北より）



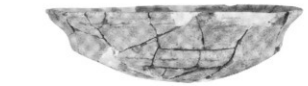
SD－6（東南より）



SD－6土層堆積状況
（北より）



SD－7・8（南より）


1

2

4

6

7

11

5

12

13

16

18

15

17

20

23

25

27

30

24

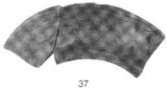
26

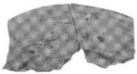
28

31

33

34


37


40

41

43

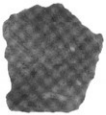
44

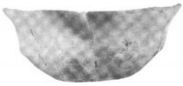
47

46

48

49


51


53

68

52

54

69

71

74

77

報告書抄録

ふりがな	よこがわ・ほんまち
書名	横川・本町遺跡
副書名	分譲住宅地造成工事に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書
編著者名	横山　貴広
編集機関	野々市町教育委員会
所在地	〒921-8815　石川県石川郡野々市町本町５丁目４－１　TEL076-248-8545
発行年月日	2002年３月29日（平成14年）
調査原因	分譲住宅地造成工事に伴う緊急発掘調査

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積
横川（よこがわ）・本町（ほんまち）遺跡	石川県（いしかわけん）石川郡（いしかわぐん） 野々市町（ののいちまち）本町（ほんまち） １丁目地内	17344	新発見	36度 32分 ４秒	136度 37分 36秒	2001年４月10日 ～ 4月23日	220㎡

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
横川・本町遺跡	集落跡 その他	弥生時代 後期後半 ～末 中世	柱列　2 土坑 溝 不明遺構　1 溝	弥生土器 須恵器 砥石 土師皿	